

# 年間活動報告

【2017年度】

・本報告は、『千總文化研究所年報』創刊号（2020年1月）に掲載した内容の内、以下の概要を抜粋したものである。

当研究所が主催した研究会および講演会等  
展覧会への出陳協力  
当研究所の所員が実施した、講演および発表などの教育・研究活動

- ・講演会および研究会の登壇者の所属、役職は、開催当時のものを表記する。
- ・掲載画像の無断転載を禁止する。

# 第1回 近代京都 絵画と染織の出会い

日時：2017年12月22日（金）午後2時～午後5時

於：千總本社ビル

## 研究発表1

### 「木島櫻谷筆〈猛鷲図〉をめぐって」

京都府京都文化博物館 学芸員 植田彩芳子

## 研究発表2

### 「高島屋史料館所蔵『刺繍参考画集』と染織下絵、製品記録写真の比較・考察」

京都女子大学 家政学部教授 廣田孝

## 調査報告

### 「奈良ホテル所蔵の天鷲絨友禅について」

千總文化研究所 所長 加藤結理子

## [概要]

近代の京都は、大きな社会変動、西欧化の波を受け、各産業界が変革を迫られた時代でした。染織業界では、4代飯田新七、2代川島甚兵衛、12代西村總左衛門が中心となり、日本画家を登用した図柄で、織、染、刺繍の技術を駆使した室内装飾品を国内外の博覧会に出品、高い評価を得ました。それらの作品は昨今、国内外の展覧会で取り上げられ、再び関心が高まっています。さまざまな分野・文化の諸要素が交差するなかで醸成されていった近代京都を、「絵画と染織品」という視点から紐解く試みとして開催しました。

植田彩芳子氏のテーマである〈猛鷲図〉は、千總が手がけた〈天鷲絨友禅「嵐ノ図」掛幅〉（1903年、三の丸尚蔵館蔵）の原画とされる作品です。長らく作者も所在も判明していなかった作品を、2017年に東京の美術商にて植田氏が発見されました。近代日本画における木島櫻谷の位置付けと〈猛鷲図〉と〈天鷲絨友禅「嵐ノ図」掛幅〉の比較研究をご発表いただきました。

廣田孝氏は、竹内栖鳳の研究者であり、また長年に渡り高島屋史料館所蔵の染織資料の研究を続けてこられました。千總とともに美術染織の製作で知られる高島屋の膨大な参考画集、下絵、製品写真を調査され、その集大成として『明治大正期の染織資料の研究（高

島屋所蔵）—源泉・下絵・作品写真の比較・考察—』（2018年、京都女子大学研究叢刊55）を発行されました。その一部として、絵画と染織、画家と技術者の関係について作品の図像からの考察をご発表いただきました。

千總文化研究所からの報告は、2017年に清瀬みさを教授（同志社大学）が奈良ホテルにて発見された天鷲絨友禅の作品を調査した内容です。民間企業において、十数点の作品が現役の室内装飾として使用されている極めて稀な、驚くべき事例です。

近代を中心とした絵画・染織の研究者20余名が集まり、発表後のフリーディスカッションでは、活発な議論が交わされました。

千總文化研究所の活動 [催事／特別鑑賞会・講演会]

千總コレクションと共に、日本文化の未来を考える 第1回

## 「千總と円山応挙－老舗のパトロネージ－」

日時：2017年9月21日（木） 午後3時～午後4時30分

於：千總本社ビル5階ホール

### 〔概要〕

千總文化研究所の設立基調講演として開催。創業460余年の千總が、先人より大切に受け継いできた千總コレクションの中でも近世以降の絵画作品は、千總と京都の町との深い関係を物語ります。日本近世美術史の第一人者である狩野博幸氏を迎え、重要文化財である円山応挙の〈保津川図屏風〉を題材に、京の町と絵師、千總と円山応挙について語っていただきました。〈保津川図屏風〉左右の隻を向かい合わせに展示し、来場者は両側を屏風に扶まれる形で作品を鑑賞しながら聴講されました。

### 〔講師〕

狩野博幸（かのひろゆき）

1947年、福岡県生まれ。九州大学大学院博士課程中退（日本近世美術史専攻）。京都国立博物館美術室長・京都文化資料研究センター長、同志社大学文化情報学部教授を歴任。専門は桃山絵画と浮世絵を含む江戸絵画。狩野派・長谷川派・琳派など18世紀京都画派の作品と伝記を研究。主な著書は『もっと知りたい曾我蕭白 生涯と作品』（東京美術）、『新発見 洛中洛外図屏風』（青幻舎）、『狩野永徳の青春時代 洛外名所遊楽図屏風』（小学館）、『反骨の画家 河鍋暁斎』（新潮社）、『江戸絵画の不都合な真実』（筑摩選書）など。博物館時代の1995年「没後200年記念円山応挙」展を担当。

千總文化研究所の活動 〔催事／特別鑑賞会・講演会〕

千總コレクションと共に、日本文化の未来を考える 第2回

## 「千總と春日大社—千切台がむすぶ縁—」

日時：2017年12月15日（金） 午後3時～午後4時30分

於：千總本社ビル5階ホール

### 〔概要〕

千總と奈良との知られざる繋がりに焦点が当てられました。1555年に京都で創業する以前、千總の遠祖は宮大工として奈良・春日大社に仕え、「若宮おん祭」に供される〈千切台〉を奉納していました。その故事に因み、千切台を商標とし、屋号を千切屋と称し、橘を家紋とした千切屋一門は、遠祖の生業を誇りに千切紋を暖簾に染めつけ、掲げてきました。

2015年まで権宮司として春日大社に奉職され、「若宮おん祭」の古儀の再興にご尽力された岡本彰夫氏を迎え、さまざまな芸能を尽くした華やかな祭礼と神事へ携わることの尊さ、奈良と京都の関係、日本文化の精神性についてご講演いただきました。実物の〈千切台〉と千切紋の暖簾と共に関連する絵画史料の鑑賞会を実施しました。

### 〔講師〕

岡本彰夫（おかもとあきお）

1954年奈良県生まれ。1977年國學院大学文学部神道科卒業後、春日大社へ奉職。2001年に権宮司となり、2015年まで同職。在任中には、恒例御神楽、式年遷宮諸神事、おんまつり等の旧儀再興、神饌や廃絶神楽の復興に尽力。奈良女子大学文学部非常勤講師や帝塚山大学非常勤講師、帝塚山大学特別客員教授、宇賀志屋文庫庫長などを歴任。現在、奈良県立大学客員教授。主な著書は『神様が持たせてくれた弁当箱』（幻冬舎）、『日本人だけが知っている神様にほめられる生き方』（幻冬舎）、『大和古物散策』（へりかん社）など。

## 展覧会協力

### 1. 泉屋博古館・泉屋博古館分館

「木鳥櫻谷—近代動物画の冒険」

2017年10月28日(土)～12月3日(日)・2018年2月24日(土)～4月8日(日)

木鳥櫻谷〈猛鷲図〉

### 2. 京都国立近代美術館

「明治150年展 明治の日本画と工芸」

2018年3月20日(火)～5月20日(日)

岸竹堂〈縮緬地孔雀に花文様友禪染裂〉〈柿に猿図〉〈棕櫚に雀図〉

今尾景年〈縮緬地菊牡丹蓮に梅文様友禪染裂〉〈梅月図〉〈狗児図〉『景年花鳥画譜』

岸竹堂ほか〈模写 沈南蘋「花鳥動物図」〉

久保田米遷〈縮緬地大津絵文様型友禪染裂〉

幸野楳嶺〈縮緬地御簾に菊文様型友禪染裂〉

### 3. ホテルオークラ東京アスコットホール

「チャリティイベント 第24回『秘蔵の名品アートコレクション展』」

2018年7月30日(月)～8月23日(木)

岸竹堂〈猛虎図屏風〉、〈月下猫児図〉

### 4. 笠岡市立竹喬美術館・和歌山県立近代美術館・新潟県立万代島美術館

「創立100周年記念 国画創作協会の全貌」

2018年9月14日(金)～10月21日(日)・11月3日(土)～12月16日(日)・2019年1月4日(月)～2月17日(日)

榊原紫峰〈蓮図〉

### 5. 福井市立郷土歴史博物館

「皇室と越前松平家の名宝—明治美術のきらめき—」

2018年9月22日(土)～11月4日(日)

岸竹堂〈大津唐崎図屏風〉

### 6. 一宮市三岸節子記念美術館

「絵を描く糸 刺繍美術展—江戸時代の着物から現代染織まで—」

2018年10月6日(土)～11月25日(土)

〈御殿文様打掛〉〈謡曲文様振袖〉〈初着雛形〉〈翁格子に地紙文様型友禪染裂〉〈錦絵風俗画文様型友禪染裂〉

〈波に雲龍文様型友禪染裂〉〈座敷尽くし文様型友禪染裂〉

### 7. 宇和島市立伊達博物館

「大名家と婚礼道具—資料から伝わる花嫁への想い—」

2018年10月27日(土)～11月25日(日)

〈牡丹藤花東青海波文様小袖〉、〈幔幕紅葉文様小袖〉、『当世染様千代のひいなかた』

### 8. 京都経済センター2F 京都産業会館ホール

「The KIMONO Styled & Re-Styled ～ファッションとしてのきもの1300年」

2019年3月16日(土)～29日(金)

〈若松文様打掛〉、〈波に鶴文様振袖〉

### 9. 西宮市大谷記念美術館

「四条派への道 呉春を中心として」

2018年4月6日(土)～5月12日(日)

山口素絢〈やすらい祭図屏風〉

## 講演・レクチャー・寄稿

「うた・ものがたりのデザインの背景」

2017年10月3日(火) 午後12:50～午後2:20

京都工芸繊維大学デザインプロジェクトB 課題提供

於：京都工芸繊維大学

---

「京友禅のわざー伝統と創造への挑戦ー」

2018年4月8日(日) 午後2:00～午後4:30

多聞会 アートと考古学シリーズII 無のかたち -Shape of the Shapeless-

於：建仁寺塔頭 両足院

---

「Chiso Yuzen -Reproducing a Furisode with Noshi Bundle Design」

2018年7月12日(木) 午前9:00～午後5:00

セインズベリー日本藝術研究所 インターナショナルシンポジウム

Fashioning Colors: New Perspectives on Japanese Woodblock Prints

於：セインズベリー日本藝術研究所

---

「海を渡った美術染織品」

2018年11月6日(火) 午後1:00～午後5:00

農林水産省 シルク・サミット2018～「明治150年」記念シンポジウム～

パネルディスカッション「海外から見た日本文化の魅力～農林水産物の輸出促進に生かす」

於：星陵会館

---

「千總の型友禅染め」

2019年4月16日(火) 午前9:30～午後1:00

公益社団法人日本工芸会 平成31年度重要無形文化財「友禅」伝承者養成研修会

於：千總本社ビル

---

『ふでばこ』(株式会社白鳳堂発行)

連載「京の美学 日本の心」37号(2018年5月30日)、36号(2017年11月25日)、35号(2017年5月25日)

First Seminar:

## Encounter between Paintings and Textiles in Modern Kyoto

Date and Time: Friday, December 22, 2017, 2:00 pm to 5:00 pm

Location: Chiso Head Office Building

Presentation 1:

### A study of *Moshu-zu* (Eagle) by Okoku Konoshima

Sayoko Ueda, Curator at the Museum of Kyoto

Presentation 2:

### A comparative study of *Embroidery Reference Collection Books* (archived in Takashimaya Historical Museum), underpaintings, and photographs of finished products

Takashi Hirota, Professor at the Faculty of Home Economics, Kyoto Women's University

Research Report:

### A study of velvet yuzen-dyed textiles owned by Nara Hotel

Yuriko Kato, Director of the Institute for Chiso Arts and Culture

#### Summary

In modern times, the industries in Kyoto faced the need to transform in response to drastic social changes and westernization. In the textile industry, Shinshichi Iida IV, Jimbei Kawashima II, and Sohzaemon Nishimura XII took the initiative in presenting textile interior decors with patterns designed by Japanese painters at expositions in and outside of Japan. These works, created using the magnificent techniques of weaving, dyeing, and embroidery, have received a high reputation. Today, the works are featured at exhibitions in Japan and abroad, receiving renewed public attention. This seminar focused on paintings and textiles and looked at how Kyoto has developed in modern times with different realms and cultures interacting with one another.

The painting *Moshu-zu* (Eagle), the subject of Sayoko Ueda's presentation, is believed to be an original painting of *Arashi no Zu* (Storm) (1903, the Museum of the Imperial Collections), a velvet yuzen-dyed tapestry produced at Chiso. Although the artist of *Eagle* and its storage location long remained unknown, Ueda found the painting at an art dealer's gallery in Tokyo in 2017. In her presentation, she discussed the positioning of Okoku Konoshima within the context of modern Japanese paintings, and spoke about her comparative study of *Eagle* and the tapestry *Storm*.

Takashi Hirota is a scholar of painter Seiho Takeuchi. He has also studied for many years the textile-related materials archived in Takashimaya, a company like Chiso, known for its artistic textile production. His research on

Takashimaya's vast archives of reference collection books, underpaintings, and photographs of finished products was compiled in a publication titled *Study of Materials Related to Textiles in the Meiji and Taisho Periods (Archived by the Takashimaya Historical Museum)—Comparison and Consideration of Sources, Designs and Photos of Works* (2018, Kyoto Joshi Daigaku Kenkyu Sokan 55). In this seminar, Professor Hirota focused on a part of the publication to describe his observations about the relationship between paintings and textiles or between painters and artisans that can be reflected in the paintings on textiles.

The Institute for Chiso Arts and Culture reported on the examination of the velvet yuzen-dyed textiles, which were found by Misao Kiyose, Professor of the Faculty of Letters at Doshisha University, in Nara Hotel in 2017, representing an extremely rare, remarkable example of more than ten such works still being used as the interior decoration of a private company.

After these presentations, more than 20 researchers on modern paintings and textiles attended a free discussion session, where they actively exchanged their opinions.

## Chiso and Okyo Maruyama—Patronage of the Long-established Shop

Date and Time: Thursday, September 21, 2017, 3:00 pm to 4:30 pm

Location: Chiso Head Office Building, Hall (5th floor) (80 Mikura-cho, Sanjo-dori Karasuma Nishiiru, Nakagyo-ku, Kyoto-shi)

### Summary

The event was held as a keynote lecture at the establishment of the Institute for Chiso Arts and Culture.

The collection, with its paintings from the early modern period and later, indicates the deep relationship of Chiso with the towns in Kyoto. We invited Hiroyuki Kano, a leading expert in Japanese art from the early modern period, to deliver a lecture on the towns and the painters in Kyoto, and specifically, the relationship between Chiso and Okyo Maruyama under the theme of *Hozugawa-zu Byobu* (folding screens with the painting of Hozu-gawa River) by Okyo Maruyama. The left and right screens of *Hozugawa-zu Byobu* were exhibited facing each other with the visitors in between, allowing the visitors to view the art piece while listening to the lecture.

Lecturer:

### Hiroyuki Kano

Hiroyuki Kano was born in Fukuoka in 1947. He was a doctoral student at Kyushu University specializing in early modern Japanese art history (withdrew from the course). He has successively served as a chair of the Department of Fine Arts and a director of the Kyoto Center for the Research of Cultural Archives at the Kyoto National Museum, and a professor in the Faculty of Culture and Information Science at Doshisha University. His study focuses on Momoyama paintings and Edo paintings including *ukiyo-e*, and his research covers art pieces and stories of 18th-century schools of painting based in Kyoto, such as the Kano school, the Hasegawa school, or the Rinpa school. His main literary works include *Motto shiritai Soga Shohaku* (Tokyo Bijutsu); *Shinhakken Rakuchu Rakugai-zu Byobu* (Seigensha Art Publishing); *Kano Eitoku no seishun jidai: Rakugai Meisho Yuraku-zu Byobu* (Shogakukan); *Hankotsu no gaka Kawanabe Kyosai* (Shinchosha); and *Edo kaiga no futsugo na shinjitsu* (Chikuma Sensho). During his time at the Kyoto National Museum, Kano organized the exhibition “Okyo: 200th Anniversary of His Death” in 1995.



## Chiso and Kasuga Taisha Shrine —A Connection Brought by Chikiri-dai

Date and Time: Friday, December 15, 2017, 3:00 pm to 4:30 pm

Location: Chiso Head Office Building, Hall (5th floor)

### Summary

The lecture focused on an unknown connection between Chiso and Nara, which was an ancient capital of Japan. Before the foundation of the company in Kyoto in 1555, remote ancestors of Chiso served as shrine carpenters for Kasuga Taisha Shrine in Nara and dedicated their special flower stands called *chikiri-dai* used at rituals, for the Wakamiya On-Matsuri festival. From this history, the Chikiriya clan used *chikiri-dai* as their trademark and started their business under the name Chikiriya, using *Citrus tachibana* as their family crest. Cherishing the profession of their ancestors, the clan has used a shop entrance curtain, or *noren*, with the dyed *chikiri-mon* crest.

We invited Akio Okamoto, who served as a deputy chief priest at Kasuga Taisha Shrine until 2015 and dedicated to reviving the ancient rituals of the Wakamiya On-Matsuri festival, to deliver the lecture on the blessing of being engaged in gorgeous festivals and Shinto rituals involving a variety of performing arts, the relationship between Nara and Kyoto, and the spirit of Japanese culture. We also held a special exhibition of related artwork with the real *chikiri-dai* flower stands and the shop entrance curtain with the dyed *chikiri-mon* crest.

Lecturer:

### Akio Okamoto

Akio Okamoto was born in Nara Prefecture in 1954. After graduating from the Department of Shinto Studies in the Faculty of Letters, Kokugakuin University in 1977, he served Kasuga Taisha Shrine. In 2001, he became a deputy chief priest and served the shrine until 2015. During his service, Okamoto devoted himself to reviving ancient rituals such as the Korei Mikagura (Shinto dance), various rituals for Shikinen Sengu (ceremonial rebuilding of the shrine), and the On-Matsuri festival as well as *shinsen* (food offering to gods) and abolished *kagura* dance rituals. He successively served as a part-time lecturer of the Faculty of Letters at Nara Women's University, a part-time lecturer and a special guest professor at Tezukayama University, and a manager of Ukashiya-Bunko Library. He is currently a visiting professor at Nara Prefectural University. His main literary works include *Kamisama ga motasete kureta bentobako* (A lunch box gods gave to me) (Gentosha), *Nihonjin dake ga shitteiru kamisama ni homerareru ikikata* (A way of life that gods praise: Only the Japanese know) (Gentosha), and *Yamato kobutsu sansaku* (Strolling through Yamato antiques) (Perikansha Publishing).